

【講演記録/「東亜同文書院」と「金沢」金沢講演・展示会】

中国の近代化と東亜同文書院、そして金沢が果たした役割

愛知大学名誉教授(地理学)、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長 藤田 佳久

(2022年9月24日、石川県政記念しいのき迎賓館)

はじめに

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介にありました藤田と申します。今日は金沢でこういう会が開かれまして大変嬉しく思っております。ちょっと前の列の方と距離があるのでマスク取らせていただきます。元々声が良くないので申し訳ありませんけど、よろしくお願ひします。こういう会に今回、金沢で講演を大変嬉しくありがたく思っております。1つは何故、金沢でやるかっていう問題でもあるわけです。

今まで東亜同文書院の記念センターが設立されて、全国で我々、ドサ回りと呼んでいますけど、全国各地で同文書院の啓蒙活動、展示、講演会というのをずっと重ねてきました。第1回は横浜でやりました。一番左上にちょっと見にくいかもしれない。あんまり良い図ではないのですが、ここでやりました。その時は何と2万5千人の人が3日間で来てくれました。他の会合もちょっとあったのですがね。我々のところを中心に据えて。その時はうちの学長はじめ、各学部長、関係者、大きな正門の入り口でみなとみらいの大きなところでテープカットを行いました。そのぐらい大規模にオープニングをしたわけでありまして。その後、由緒あるところを中心にして次の年は東京で、次いで弘前へ行き、山田良政、

純三郎中心の展示を行いました。福岡、こも多くの人が書院、大陸へ行った県です。シカゴでもやりました。アメリカのアジア学会というところから招聘されたのです。アメリカはやっぱり主な学会はみんな持っているのですね。アジア関係のアカデミックなセンターもアメリカが持っている。そこまで行ったのです。その年に神戸でもやったのですが、この原作の図から神戸が落ちていました。これがないと19回になってしまうのですけども。うちの課長さんですね。これを見事に補修していただいて、図中へ並べたわけです。だから、同年は大変忙しい年でした。以降、順番に京都とか米沢。ここは愛大の本間先生の故郷ですね。名古屋とか富山。富山は最後の分校がありました。呉羽紡の一角で、終戦の年にありまして、この話も後で時間があればできると思います。沖縄もやりました。ここでは大城先生をお願いいたしました。芥川賞の受賞者で亡くなってしまったのです。当時は、大城先生がご存命で講演をやりました。長崎は上海まで行ったり来たりした港町でした。近いところでは岐阜。それから広島でもやりました。それから松本。これも小岩井学長の出身地という縁がありました。地元の名古屋とか浜松、岡崎、高松。そして20回目は金沢です。本当はこの富山からす

ぐやりたいところもあったのですが、ちょっと近かったものですから。間があいて、コロナ禍がまたあったものですから。3年前にやる予定だったのですが、2年延長ということになりました。そういう点で金沢へやっとなり着いたということでありませう。何故、金沢かっていう。昨日からお客さんが見える度にそういう質問をぶつけられてまして、その辺のところもご説明します。では画像の次をお願いします。

I 岸田吟香と東亜同文書院の3聖人

皆さん方もこれまで若干関心を持っていただいた方にはおわかりいただけますが、これが三羽カラスの方々ですね。東亜同文書院の原点、三羽カラス。戦争中の近衛文麿。総理大臣のお父さんの篤麿公です。彼が14歳の時にお父さんが亡くなってしまった。もう10年生きておられたら戦時中の総理大臣役ももうちょっと違う方向になり、ひょっとしたら戦争もなかったかもしれないというような気もするのですね。この人もそうです。この荒尾精は種火をつけながら38歳という若さで台湾でペストにやられ、早死にしてしまった。3人目の根津さんだけが院長を60数才までやりますけどね。この3人なのですね。最後が愛知大学の設立者であった本間喜一という学長。

何故、金沢かっていうのは今、脇水先生のご説明にもありました。この3人が元々スタート台に立っていたわけですけど。その最初は岸田吟香。岸田吟香っていうのは著名な画家の岸田劉生のお父さんなのですが、この人は国際商人としてスタートしている。彼が何故そんな立場に立ったかってお話をすると5分か10分かかってしまう

ので、なかなか上手く時間が使えないのですけど。要するにヘボンから教えてもらった目薬を中心にした日本の国際商人です。ヘボンっていうのは日本のローマ字を普及させた人です。目薬を活用して資産をつくり、横浜で最初の新聞を出し、新潟で油田を開発したり、汽船航路を作ったり、100種類を超えるくらいの事業をやった人です。国際商人第一号ですね。この方に教えられて荒尾精は『清国通称綜覧』という本を書きます。何故か。清国があれだけ列強にやられているその背景には経済力の低さがある。そこで日本と清国と貿易をやれば両方がウィンウィンの関係になって列強に対抗できるし、その先に日本を狙っている列強に対しても日本は強くなれるというような思想を徹底的に実践し、清国の通商関係の実態を現地で調査し、若者も投入して私塾みたいなものを作ったのです。

II 日清貿易研究所の金沢での学生募集と近衛篤麿

しかし、私塾そのものは失敗をしたわけですけどね。そこでその経験を踏まえて、これも後でちょっと出てきますけど、「日清貿易研究所」をつくります。最初の名前はそうじゃなかったのですけど。今日お配りしましたもう1枚の後ろのほうに矢印が交差したような図があると思いますけど、この一番下ですね。最初は「日清貿易商会」という商社を作る予定だったのです。ところが政府の支援を信用しておったのに内閣が総辞職してしまい、資金がこなくなってしまって、縮小しました。それで「日清貿易研究所」という付属機関を表に出した。これが結果的に大変良かったのです。

そういうようなことで「日清貿易研究所」を上海で作った。その時に学生を募集するために荒尾精が全国を回って学生募集をしました。学生がたくさん集まりました。金沢でもやりました。金沢に訪れた時、これもさっきご説明がありました。もう1回復習みたいなものですね。地元の実業界の野村喜一郎、それに納富久次郎、この人は幕末に上海へ幕府が選んだ20数人の若い侍たちと一緒にその土地を踏んで向こうを見てきた人です。この人が帰ってきてから各県の工業学校の校長になりますが、石川県でも最初に工業学校の校長になって焼き物も含めてそういうもの輸出できるのではないかと。また工業化をするっていうことを一生懸命やった人です。もう1人。その時にもう2回も清へ行っていた西本願寺の布教のまとめ役の人で、北方心泉という人です。この方が常福寺というところのお寺さんです。3人がちょうどこの会合に居合わせて、知事とか当時の県会に絶好の機会だから県費生として学生を送るべきだということを答申し、それが通っちゃったのです。実はこれよりも後のほうを見ていきますと、東亜同文書院はみな県費生の入学方式です。県のお金で1人、2人、3人ぐらい選ばれてそれが上海に送り込まれた。だから非常に優秀な方々が選ばれたのですね。この時は郡が9つあったから、各郡から1人ずつ選ばれた。その中の1人がさっきも紹介がありました土井伊八という実業家になった方ですね。そういうことで県費生という今まで日本では考えられない枠でもって扉を開き、日清関係の貿易の扉を開いた、というところが金沢及び石川の1つの東亜同文書院に対する非常に大きなサポートになった

のです。その前例を作ってくれた。

Ⅲ 近衛篤磨と劉坤一、そして北方心泉

もう1つは、後でもちょっとふれますけれども。近衛篤磨公が2回も世界旅行をやったその帰りに、清国中央地域のトップの劉坤一を訪ねた。漢口ですね。劉総督に会って、あなたの国がこんなに欧米にやられているのは教育レベルが低いからだの見解を述べ、日本と清国の優秀な学生を集めて一緒に教育をして一緒にトップに行けるようにしましょうかと提案したのです。するとその劉坤一は大賛成するのです。この人は清国側の地方行政のトップですよ。当時の清国の。近衛篤磨とは全く面識がありません。いきなり会合をして合意に達したのですが、その背景には、北方心泉の根回しです。劉坤一と北方心泉。常福寺へ行きますと展示室があります。そこの入り口を開けると、心泉がこんな感じの姿勢で、愛嬌良く迎えてくれるのですよ。びっくりして。あれはお坊さんかなと思うのですが。そういう即興力というか、人間味というか、そういう性格がおそらく国際的な人の繋がりの中で向こうのトップと繋がっていたと思います。だから、坤一から心泉にたくさん送られた物が展示できるのです。そういうことがあったから、近衛篤磨と劉坤一はスムーズにいけたのですよ。いきなりの対面ではなかなか大変ですよ。当時の外交ルートというのはそう簡単じゃありませんから。そこをこの金沢のお坊さん、心泉が面倒をみたわけですね。そういうこともあって、金沢がまた一段と大きな役割を果たしたわけですね。東亜同文書院がその前に清国の学生を受け入れるということで、南京同文書

院を作っていこうというので合意していくわけでした。これが常福寺の写真。1週間前に撮ってきたばかりです。

1週間前、久しぶりに金沢に来ましたら駅が名古屋駅ぐらい混んでいてびっくり仰天しました。新幹線の影響かもしれません。観光客がものすごく多くてびっくりしたのですけど。そこの寺は非常に静かでした。こちらのほうに展示場があるのです。こんなお坊さん。可愛い感じで出迎えてくれてびっくり仰天したのですけど。これは鉛筆で書いてある絵です。こういうような展示室があって、ここにはさっきも出てきた三田さんも来て一生懸命この解説をし、清国との関係を論じておられます。ちょっと戻りますけど、近衛篤麿が世界をずっと回って、アメリカへ行って、ヨーロッパは2回目ですけど。アジアに戻ってきて、ここから南京へ行ったのです。その時に会ったのが劉坤一です。ここで会ったのです。何で会えたかっていうのはさっきの言った通りです。その時に東京同文書院を作って清国側の優秀な学生を各省から集めたのです。日本側も集めて。急な話だったから、そう簡単にはいかなかったところもあるのですけれども。その時に近衛篤麿公としては、せっかく作ったならしっかりした建物が欲しい。その時にお寺さんのほうには新しく建てられた建物があり、それを借用したいと申し出たけど、さすがにこれはまだ作ったばかりで、布教活動のセンターにしたいと思っていましたから、京都西本願寺の本部は、貸与することは駄目ということになりました。そこで近くのお寺を借りて、その時にそのお詫びに学生をこれからも石川県から呼びますよ。という約束もしてもら

ったりしているわけです。

こういうこともあって、このあと東京で、東京同文書院という学校を近衛が開設して引き受けて留学生をたくさん受ける時期があるのですけど。そういう経過の中で、荒尾精の考え方が前面に出て、ビジネススクールというかたちで東亜同文書院が生まれるというわけです。だから、そういう経過の中で考えますと、ご縁もありましたけど。この赤文字のプリントのところもそうです。そこのところで、この金沢が非常に大きな貢献をしたということで、前から展示会を金沢でやりたいと思っていたところ、ちょうど20回目ということで今回金沢でやらせていただいたということでもあります。この写真は清国側の劉坤一です。彼は清国メインランドの中央部を支配した実力者です。篤麿さんも小学生時代は貧弱な体格で、東京へ移ってからの小学校も半年も行けなかったのですね。そこで英語の教師を家庭教師に雇ったのですが、その時に英語の教師がこの体じゃあかんからと教える前に相撲をとった。その結果、皆びっくりするほど立派な身体になった。ちょっと余分な話をしますと、彼は英語で勉強したことから、イギリス、アメリカへ留学したいと政府側へ言ったら、当時の藩閥政治のトップは、帰って来たら自由民権運動が力を得るに違いないから駄目だというわけで、断念したのです。

しかし、あくる年、その反対派のトップの三条実美が亡くなったため、プロシヤなら留学してもいいということになったのですね。しかし、全くドイツ語をやってなかったものですから。ドイツ人の家庭の中に入って勉強して、ボン大学からライプチヒ

大学へ。ボン大学は日本でいう学習院。しかし、向こうの貴族の息子たちは酒呑みばかり。勉強は一切してない。そんなところへ来たって駄目だということでライプチヒ大学へ移ります。そこで猛勉強。今では当たり前ですけど、大学の中のゼミとかたちの授業。教師と学生が共同で議論しながら練り上げていく。そういう授業方式を初めて知り、帰ってから学習院ですぐ取り入れたけど、他の教員がそういうことできないから、近衛公が亡くなると自然消滅。京大の先生も1人ライプチヒ大学へ勉強に来ていたけど、京大に戻ってゼミをやるうとしたら他の先生が駄目。当時は教師が一方的な講義授業をやるというのが授業でした。ここから先はまた後に。

IV 中国近代化の模索とナショナリズム、そして東亜同文書院

私のタイトルには「中国の近代化」との関係を出したのですね。なかなか漠然として難しい問題です。現在の中国を見ると、戦前とは体制がずいぶん違って価値観もずいぶん違います。こっちはこうなのだけど、向こうはどうやって書院の評価をしているかっていう問題はそう簡単ではありません。レジュメの黄色い線の上のほうは主な日本との関係、あるいは中国側の状況。色々な変化がある。中国近代化への揺れです。先ほどの劉坤一が近衛篤磨公と南京同文書院につなげ、孫文らが現れて山田良政と提携する。こういう中での日英同盟の結果、日露戦争の最中にイギリスの依頼で5期生がシルクロードを踏査し、ロシアまで調査に行っている。ロシア側の入り口までね。一方、革命同盟会が東京ででき上がって、『支

那経済全書』の大作を調査した学生たちがここから作り出してくる。色々運動があらわれます。対華二十一か条要求っていうのが早稲田の総長になる大隈重信が政府のトップの時にやったのですよ。これによって中国は反日運動を引き起こしたわけですね。二十一か条の要求をやったのだけど、その裏側に秘密条項が含まれ、それが暴露されてしまったため、当初列強の国々はオクケーしていましたが、それが暴露された途端に全て駄目になった上に、中国中で反日運動がわっと広がった。つまり、中国人のナショナリズムがここから出てくるわけです。だから、それから日中関係はややこしくなる。そういう中で孫文も日本は欧米の手先とか、欧米と同じようにやるのか。アジア人のために日本独自の路線を選べって神戸で大演説をやっているのです。

色々説明したいのがありますけど。それやるともう時間がないです。これがさらに続きます。五・三〇事件。トヨタ紡績からの事件です。そこで労働者の反感デモがあって、街頭へ出たデモ隊をイギリスの警察が射殺した。それが全土に広がってさらに反日反英運動が起こります。この時すでにソ連のコミンテルンっていう運動がその背景にあったというふうにされております。あれだけ各地へ浸透した組織力がなければ、各地の半日デモは上手くいくことはあり得ないというわけです。この時の書院の学生たちの旅行記を見ると、その中に乾燥地帯の旅行記がありますけど。そこへ行くってどんな小さな町に行ったら反日運動が起こっている。運動を中心にデモやっているのは小学生で、旗を持って行進している。そのリーダーが上海など都市から派遣された

オルグの人たち。だから、この時は全国的にそういう運動をやってナショナリズムを結果的には湧き上がらせていった。だから、ここから日本と中国との関係は一変です。色んな意味ではね。レジメの下の方は東亜同文書院関係のものを中心に挙げました。

書院の中でも海軍に反戦ビラを撒いたっていう事件もあるし、左翼の学生連中が捕まった事件もあって、東亜同文書院はスパイ学校だなんていう説が戦後流されたりしましたけど、実質的にはそんなことはないわけですね。そういう反日環境の中で、書院生の中には思わず反抗し、通訳従軍をしたケースがありましたが、犠牲者が1人出て、書院生は戦争の凄さにびっくりして度肝を抜くわけです。

最後に国の命令で学徒出陣があったわけです。本間学長が他の日本国内の学長のように命を投げ出してこいという送別のコトバに対して、命を絶対になくすのではない、生きて帰って来いと、そういう挨拶をして学生を擁護する形で送り出したわけです。ここから愛知大学設立をめぐる流れがあります。こういう中で、それぞれをどう評価していくのかって大変な問題です。いっぱい課題があります。これを書院のほうから見えていったらどうかなっていうのが私の考え方ではあるわけですね。だから、全部とも扱えませんが。途中でそういう問題も少し扱います。

V 荒尾精の清国カタログと日清貿易研究所

まず、岸田吟香ですね。これは晩年の時代と盛年の時代の顔ですね。吟香の息子が

岸田劉生という有名になる画家です。そのお弟子さんが豊橋の豊川堂の方ですね。その方が愛大の「愛」というのロゴを作ってくれたのです。だから、これは非常に歴史的なロゴですね。最近の流行で愛知大学のロゴはアルファベットのAなんて示していますが、非常に形式的で無意味です。「愛」なんていう字はなかなか稀少で使えないですからね。岸田劉生派の愛大のロゴは非常に愛大の独自性がいっぱいあります。この歴史もまた語れますからね。

そして、さっきの話にちょっと戻りますと、荒尾精が最初に上海楽善堂で色んな学生を集めたわけですが、その出身地は九州と東北が多いのです。これは西郷隆盛が明治政府と戦った時に敗北した若者たち。明治政府にこれで士官できないだろう、されないだろうという訳です。東北の会津藩を中心にした人たちが自分たちも長州藩に負けてしまったので、先がないというわけで結構大陸へ行った若者がいます。後に大陸浪人なんて言われていたのですが。そういう人を荒尾が集めて学校を作って中国の貿易関係の情報を集めたわけです。集めたのをずっと資料から確認して地図を上には私が落としたり地図いっぱいになりました。貿易ができると商品のカタログを紹介した。清国についての代表的な作品です。こういう商品がいっぱいありますよというわけです。こういうカタログ集も同時に出している。合計2千ページあります。その中でもっと注意しなくちゃいけないのは、この中には大阪から輸出された日本製品もあるのだということが書いてある。だから日清貿易は十分できるのだ。そういうことを言っている。

荒尾の収集資料を根津一が編集した『清国通商綜覧』の内容は、全3巻2千ページあります。やっぱり商業地理から始まって主な国の経済的なベースのシステムですね。それから商業取引の実際というところも面白い。ここのところから商売やるにはどうしたらいいかということが、例えば宴会のやり方とかね。家を借りるとか。細かいことがいっぱい書いてある。現場へ行ってすぐ商売ができるような仕組みを紹介したりしている。

第2巻はさっきの商品カタログ。こういうのばっかりですけどね。こういうのを出して日本人は初めて中国の実態を知ってこの時びっくりした。それまでの日本人は漢詩漢文しか知らない。しかし、あれは中国の貴族の作品ですね。庶民を描いていないのです。そういった点で初めてその実態を知って皆びっくりしてベストセラーになりました。荒尾精はすぐに日清貿易商会を作って、それでもって貿易の取引の拠点にしようとした。これは、商社です。ところが国のバックがなくなってしまったので、急遽この附属施設である日清貿易研究所を表を持ち上げて勝負することにしました。

そしてここに前述したように金沢の登場があるわけです。すなわち、同研究所へは、金沢だけで9人の入学生、全国の中で言いますと突出しています。九州のほうが多いのは、元々距離上の関係で強いですからね。しかも石川県だけ県費生で入学というわけです。こういうことから石川県の人たちがずいぶん頑張ったということがよく分かります。これはそういう過程の中で、東亜同文会っていうのが経営母体で誕生して、その会員をずっと広げていく運動も一方で

はありました。その時に日本では、大都市が多いのですが、大陸のほうにも色んな人たちが出てきました。当時のインテリです。日本で言うとおおさんとか神社の神主さんとかが圧倒的に多いのです。当時のインテリは今みたいな高等教育もありませんから。そういう人たち。大陸でもそうです。中国側もそういう人たちが集まって。だから、徐々にそういうところで東亜同文会が支えられるようになっていった。そこに日本との交流みたいなベースが少しできてきた。

南京同文書院というのを作ったらどうだと言って近衛篤磨と劉坤一の2人の日清の代表があそこで語り合った。こうして第1回目の学生たちが集まりました。これは日清貿易の前ですね。こんな感じで集まったのです。まだ当時は急な話だったので、そんなに学生が集まったわけではありません。集まった学生は、石川県はいないです。すでに日清貿易研へ皆出しちゃった。その後でしたから。広島とか熊本とか福岡あたりで、これは伝統的に海外進出をするっていう県です。広島県は山が多いから。田んぼが少ないから。ハワイなんかへ行く人が多かったのですけどね。大陸へ行ったら人も非常に多い。そういうベースの中で南京を選んだ。

一方、すぐ勉強したいっていう清国側の学生をすぐ劉坤一は送る。自分の孫まですぐ送るっていうから泡食ったのが近衛さんですね。すぐ自分の邸内に校舎を建てて、その学生を収容しますが、それじゃ狭すぎるっていうので新しく校舎を作ったのが、1914年、当時の東京同文書院。これ、全学生です。こんなにたくさん中国全土から学生が集まって東京へ来て勉強した。嘉納治

五郎っていう柔道家がおりますが、彼も留学生受け入れに熱心でした。東京の神田には毎年1万人近くの留学生が来るというような時代がこの後あって、清国の学生に対して日本の先端の技術とか文化とか日本が学んだヨーロッパ、欧米の文化というようなものがここでずっと伝授されていくわけですね。

VI 近衛篤麿による荒尾精の巨大な追悼碑と愛大

これは荒尾精の追悼碑です。荒尾精が早々と亡くなったので近衛篤麿が追悼の巨大な碑を作った。これ高さ5メートルもあります。ここに九烈士の墓なんて突然こんなのが出てきたのですけども。その前のストーリーがあります。日清貿易研究所ができて卒業年に日清戦争が始まってしまったのですよ。そうすると中国語のできる人って日本人じゃほとんどいないから、この卒業生たちは次々と通訳従軍させられたのです。そのうちの10人は、トレーニングも受けていないのにこれは戦争ですから、スパイ行動に行かされて、10人のうち9人が捕らえられ、首を切られ、処刑されたのです。その報を知った根津一はその時に、京都の若王子という所ですけど、そこで隠棲をし「九烈士の墓」を建立し、彼らを葬ったわけですね。家の中には仏壇もつくりお祀りをした。亡くなった人に子供がいた時は、その子を引き取って養子として育てた。そういう経緯があります。

三田さんっていう書院42期の石川県金沢生まれの人で、2年前に亡くなられたのですが、碑の上のほうはもう読めないですけど、全面の苔をとり、それをきれいにし

た上で、きちんと活字にしてくれた。そういう経過があります。その後、愛大の関西、西日本支部の人たちが中心になってこんな感じで毎年祭礼をしています。この時は大学の中にちょっと入っていますけどね。今年10月の31日、有森さんや堀田さんが主催して実施しております。

VII ビジネススクールとしての東亜同文書院と「大旅行」の展開

ところで、ビジネススクールって一体どんな学科目があったのだろうかっていうのは、これです。うち「倫理」というのは、根津一院長が長年、学生たちに説いた倫理の科目です。儒学を中心にして、経済活動はいいけれども、荒っぽい資本主義じゃなくしてお互いにウィンウィンになるような関係の企業活動をやりなさい、という内容です。「清語」っていうのは中国語です。1週間に12時間。英語は8時間。政治地理とか商業地理とか全部中国に関する商務科科目です。当時は政治科っていうのもありましたけどこれは途中でなくなります。商務科単独中心です。こういう徹底的な中国に関するビジネスの科目をやりました。当時としてはよくこれだけのことを教えられる先生もおったなど、そこもまた感心しますけどね。そういうかたちで色んなビジネスマンを育てたわけです。

最後にこれが後でまた出てきますが、中国の大調査旅行です。まずは、東亜同文書院の2期生です。2期生の出身府県の地図を作ってみました。石川県からは2人。全国にだいぶ広がりつつありますけど。岩手県などはお金がないというわけでゼロがずっと続きます。その時に日英同盟が結ばれ

て、イギリス側からは、ロシアが清国西部へどんどん進出しているらしいが、その情報をイギリスは掴めない。イギリスは南のインドとかマレーシアとか、南アジアのほうは植民地ですけど。その北側にはヒマラヤがあり、越えられない。そこで日本へその情報入手を頼んできたわけです。しかし、日本だって当時、そういう手段を持ってないわけです。しかも、日英同盟上のメンツに関わる問題があるというわけで、外務省が東亜同文書院に頼みに来たわけです。ところが、荒尾さんも根津さんも軍人をやめている。また、近衛さんは特に藩閥政治が嫌い。軍隊も嫌い。そのため、明治政府は、最初に書院を設立する時にお金を出し渋ったのです。いくら頼んでもね。色んな理屈をつけられて駄目。近衛さんが政府嫌いでしたから。ところが中国で東亜同文書院関係をめぐって色々シンポジウムとか研究発表をやりますと、中国の若い研究者の発表は、東亜同文書院は明治政府と軍部が作ったのだと発表します。それに対してそんなことはないっていつも反論するのですけどね。中国側はそういうような目で見ていたのですね。

さきほどの件ですが、書院の根津院長は2期卒業生のうち5人なのですが、この写真は、1人欠けていますけど、5人を東京の東亜同文会に呼んで、シルクロード沿いの調査を頼んだわけです。その内の1人が波多野養作という人です。この遺族の人ともつながりができたものですから、そこから色々こういう写真などもいただきました。この人はその後、鉱山の会社に入って力を発揮しました。奥さんの話だと、日中戦争が始まった日、「軍部の馬鹿野郎」と言って

頭にピストルを持ってきて家族の前で自殺したって言うのです。自分たちがこれだけ一生懸命、日中関係で努力してきたのに軍部は何をするのか。そういう憤りですかね。初子さんという娘さんから、父はその方の目の前で自殺したのだという話を聞いたことがあります。

ところで、5人のコースは、北京からスタートした。ここはロシア。色んな、5コースぐらいに分かれて北京からスタートするとロシア側のスパイが尾行してきたと記録しています。それを逃げながら、隠れながら往路1年、復路1年、計2年の大変な大旅行でした。それで大成功したから、帰ってきてから在校生たちが、俺たちもやりたいという話になったわけです。当時の在校生は、修学旅行しかできなかった。国からもお金がないし学校にお金がないから。在校生のためにも何とか思うわけですけど。その直後はあまり上手くいかなかったけど。しかし、5人の大旅行が成功したのは現地にも通用するような中国語の教育をやったためです。『華語萃編』というのは日本人用に初めてできた中国語の教科書。1年生からのちには4年生の第4集まで揃います。例えば石川県の2年生は石川県の新1年生が入学してくると、朝、昼、晩と食事の前後ぐらいに庭に集まって発音の練習をさせられる方法も採られました。そして1年生の成績が悪いと2年生が叱られるという責任制です。だから新入生も一生懸命、皆勉強した。そのため、書院の人たちの発音は非常に良いと評価され、中国人よりも良いという人がたくさん出てきたわけです。

ところで、大調査旅行が何とかできないかという学生たちの希望をどうするかとい

うことです。それができたのです。これはどういうことかと言うと、5人が行って大成功を収め、イギリスにもメンツが立ったというわけで3万円の報償金を外務省がくれたのです。3万円ということは書院の学生、1学年100人ぐらいで3年間。グループを組んで数か月間ぐらい旅行してもお金は大丈夫という目処です。チームを組んで行きたいところへ皆行けることになったのです。そこでどういうテーマかを自分たちで選ぶ。ビジネスのスクールですから、経済的な問題が多いですね。貿易の調査とか流通、産業とか経済政策とか。この一行の写真はまるでアフリカ探検隊みたいです。

こういう格好をしないと当時の清国では外国人、しかも身元不明の人物は消されてしまいました。だからこういう外国人としての格好をする。日本の国旗を1人ぐらいが持って旅をする。それを見た戦後のイデオロギー論者がナショナリズムだなんて言いましたけど、それを持たないと殺されてしまう。日本人だと分からないと殺されてしまう。

これなんかお話すると長い話になります。辛亥革命の時に長江流域の2河川から今回のコロナウィルス発祥の地、漢口に入り込んだ2つの班がありました。スパイだとしてすぐ捕まったわけです。カメラを持っているからと。しかし東亜同文書院生だと分かった途端、敵も味方も合わせて丁重に東亜同文書院生だとして歓迎してくれた。上半身裸になって向こうの兵士と一緒に盃を交わしながら踊りまくったと記録されています。それが歓迎の挨拶なのです。こうして、大調査旅行は各地へ展開します。これは北満での調査旅行です。3人から5、6人

が1チームで3か月から長い人で6か月。足だけの調査。目的地は彼らが若いから、遠くを選んでなるべくあちこちを見ながらそこへ行って調査して帰ってくる。そういうわけで大旅行が始まったわけです。実際は調査もやりますから大調査旅行と呼んでいますけど。書院では「大旅行」と呼んでいます。これは華中です。色んなところを歩いた。河南、南のほう。

これはスマトラ、シンガポールのヨーロッパ植民地下の写真。中国の本土の場合ですと、全部歩きですから。徒歩で何日ぐらいかかるかというのが計画できるのですが。ここ植民地へ行ったら日本人の現地入植者もたくさんおる。ヨーロッパの植民地ですから道路が整備されていて大体の日本人は車を持っている。書院生を次の目的地へ送るぞと言って車で送ってくれるため、最初は歩きの予定がずっと早まってしまったというようなことが出てきます。旅行先では各県の知事さんに会います。そこへ挨拶に行つて調査させてもらいますよという許可を得るわけです。軍閥のトップの人たちにも会います。こういう人たちはほとんど日本への留学生でした。留学生の人ですから日本語も少ししゃべれるのですね。そういう人たちも大歓迎してくれるわけです。面会した日には夕食になると軍閥のトップからご馳走が届いたり、県知事からご馳走が届いたりする。強盗団が多いから危ないというところは、ちょっとした兵隊さんを付けてくれたりする。そういうような関係からも書院の人たちが中国側からどういふふうに見られていたのかということが分かります。

ここは谷間の間を通っていくシーンだと

思います。こういうところを歩く時は注意を払わないと、強盗団にやられてしまうのです。チーム編成をその対応のかたちでやるのです。私も中国へ度々行ったけど、日中、強盗にあっている人を見たことがあります。前のほうに行くとも2人見張りをし、後ろのほうも2人がちゃんと見張りをする形で、だから5、6人1チームでやる。あるいはバスや船の中で突然、青龍刀を出して乗客から持ち物を取ってくとかね。そんなのがよくあったのです。

これは一番遠くのほうへ行った青海省。これが上海。ちょっと図に拡大していますが、ここまで行くと歩いて3か月、6か月というのはなかなか難しいのです。したがって、時間的にね。これは非常に珍しい例ですけど。蘭州まで行った連中が、地元の管理者が主催し、部族の人たちを自分たちの領民だとするという儀式を見たのです。一緒に行って、そこでこういう写真撮影ができたわけで、彼らはチベット族の兵士です。私もその後、ここへもずっと行きました。なかなか大変なところで、山頂にネズミがいっぱいおるのにびっくりしたことがあります。

大旅行の全体をみると、大体こういうふうなコースです。これは6期生ですから最初の頃。これは12期生です。12期生になると大分コースが長くなってくる。その一部を抽出しただけの地図です。とにかく、長いコースを歩いた。歩いて実感して農民から食料を買い出して、次の町はどこだ、どこだって話をしながら歩いた。そういう記録が残っています。いずれにせよ、膨大な記録です。

それだけに本当かどうかの確認をしなく

ちゃいけないっていうので、海南島を予定したチームが、海南島は強盗団が多くてコレもひどいから香港の領事館へ行った時に、そこへ行くなって言われたことがありました。多くの書院生はそういうことがあるところに強引に行くのですよ。しかし、このチームは行かなかったのです。台湾がこっちですけど。ここの周辺をずっと歩いて、結局ここ福建省の調査をやるのですね。だから、予備調査が全然できてない。それを踏まえて、私は10日間ぐらい日誌で後を追っかけたわけです。当時、書院生は田んぼの畦なんかを歩いているからその通りにはいけなかったのですが。これが書院生のルート。これが私のルート。その結果、書院生の記録は上手くできているのですよ。非常に上手くできている。きちんと観察していることがわかったのです。記録はきちんと出来ている。分析の対象にできるというふうに確信したわけです。それで旅行記録の研究を本格的に始めたのです。

では、どんな調査報告をやったのか。これは京津駐在財政調査班報告書の表紙。北京と天津コースです。これは24期生の長谷川書院生が記録したと書いてある。これは広東地方の政治局関係の調査と産業に関することです。これは紡績業です。山西省や天津。これは鉄道がどのようなかたちで広がりつつあるか。中国の近代化の一端を書いています。そういう目から見ると近代化の状況。その中で貧しい農民たちがどうしてでき上がってきているのか。山のほうも森林資源というのが非常に貴重ですが、片端から切っちゃった調査もやっています。当時は地図がありませんから。自分たちの歩足で作った地図です。つまり、伊能忠敬

と同じです。歩く歩数の間隔がどれだけか。乱れないように歩くのですから、大変ですよ。それによって距離を出して、方位の磁石があるから、それによって大雑把な地図を作成したのです。

これらの報告書は印鑑が押してある。これは上海東亜同文書院図書館の印と書いてありますから。そこに納められたのが分かります。こうして全体で20万ページに達したところで、『支那省別全誌』全18巻を刊行しています。活きた中国地誌としては世界初の刊行です。うちのセンターには原本である手稿は全てが揃っているわけではありませんが、各巻には必ず揮毫が寄せられています。これは軍閥のトップ、呉佩孚の揮毫で、すぐれた書体です。中国のメインランドの中央部を真っ二つに分けるくらいの勢力でした。ところが、風船玉が膨らんだ途端にぱんと跳ねたりして縮小したりする様子も浮かび上がってきます。

これは黎元洪ですから、袁世凱の後の大統領です。黎元洪というのは、先ほどありました漢口での辛亥革命の時に革命軍が勝って、清国軍が敗けたのです。革命軍が勝ったけど、誰も有名な人物はいない。あの国は、やっぱりメンツの国だから。知名度のある人がリーダーにならないと本当に勝ったのか誰も信用してくれない。そういう点では、中国は同時に宣伝の国です。相手方の黎元洪を引き入れ、革命軍がそのトップに据えるのです。敵の清国側のトップを自分たちのトップに据えて全国に勝ったと電報を打つわけです。各地の人々は皆びっくりするわけです。これからジワジワと広がり数か月ぐらい立ってようやく清国が敗けたことになったのです。

最初は3年分のお金で始めた大旅行だったけど、報告書が非常に素晴らしい出来だったから、書院は優先的にこの旅費代を出していくようになりました。当初は日本人がまだ行かなかったコースを最初は選びますから。そのうち後輩も行くようになります。それを日記文も書くようになってコースの様子も記録して下級生に送ったのです。

ところで、東亜同文書院が第二次上海事変で焼けてしまいます。中国軍の兵士によって焼かれてしまいました。日、独、伊、防共協定が結ばれていましたが、日本が連携したはずのドイツの将軍は民国軍を強化させていたのです。ヨーロッパ諸国というのは日本ほど単純じゃないということが分かります。その結果、なかなか大変で校舎は焼かれてしまったわけです。その後の書院は、そこで隣の上海交通大学を借用して入ったのです。その後の旅行記録などは交通大学に残されたわけです。その後継された旅行記録は戦後、北京の国家図書館に移管されました。書院の卒業生もそこへ訪問するたびに嘆いて帰ってくる。大旅行記録が図書館のトイレの中までいっぱい、3階部分にもうむちゃくちゃになって入っていると。こちらは当時の参考資料も含めて。喉から手が出るほど見たいし、ほしかったのです。そしたら突如、向こうが全部その中身を、手で書いた原稿を、ですよ。それを製本にして出版したのです。それは最初200冊で200万円。それどころか、東亜同文書院が出した『支那省別全誌』とか書院が出した本を片っ端から全部とっていいぐらい中国側は出版しています。それまでは、あれは日本帝国主義の作品であって軽視し、トイレの中まで詰め込んだりし

ていたのにです。

ところが今は一変しています。逆に言いますと、民国時代のこれだけの調査をやったのは、当時の民国政府は大混乱の中ですから、やってない。さっきも言いましたが、事変が次々と起こってね。民国下では調査どころではなかったのです。しかも、書院生による記録を読んでも、すごくきちっと書いている。最近では北京大学の中にも大旅行をベースにした調査研究班ができたりしております。だから、そういうかたちで大調査旅行記録を中国側は日本帝国主義の何やった仕事だとかというスタンスでしたが、その中身の客観性は評価に値するとみた。中国の本音が示されたということですね。こういうところが、近代化のプロセスの中国側の1つの対応かなという感じがします。

VIII 「大旅行」記録からみえる中国

これらの大旅行記録から何が分かるかという点です。結構これまで私はその内容について何冊も出版させていただきました。とくに、日記は非常にイキイキした描写されているから、この辺のところを中心に紹介、分析してきました。例えば、強盗団、土匪。強盗団との出会いや情報を日記の中から見出し、その分布図を作っていきますと、省の間の軍閥間の戦いですから。破れた兵隊が省の間へ逃げ込んで強盗団をやるわけです。組織化もみられます。あるいは、大河の黄河が氾濫すると、この下流の一带は流されてしまって農民も農業ができなくなるから泥棒や強盗団に代わっていくのです。それが次々と全土に広がっていく。そういう状況が読み取れます。これはあちこ

ちの旅行へ行った時に五・三〇事件の後の状況です。大旅行へ出発する時は何の問題もなかった。ところが、各現場へ入った途端にあちこち反日運動に遭遇したのです。これはイギリスのボリスが、5月30日、上海の日本資本の紡績工場から繰り出した中国人デモ隊に向けて鉄砲で撃って何人か殺されたという事件が発生し、反英、反日運動が拡大。このコースなんか砂漠ですよ。砂漠地帯。小さな集落ですけど。そこへ行っても小学生たちの反英、反日デモでいっぱい。旅行隊に関しては中央から派遣されたオルグが先回りして、大旅行班の連中が来たら宿泊を認めるな。商品を売るなという妨害があつて大変なことになったのです。旅行先で寝るところがない、食べ物もないという厳しい事態が発生したのです。ところが、中にはこれを機会に現地へ入っていたオルグの人物からちょっと君らとディスカッションしたい。そこへ来てくれ。と呼び出され、中国人側とディスカッションでやったところもありました。だから、旅行班の中には全うしたケースもみられたが、多くは途中で行けなくなって、中断した班もありました。

つまり、そのことから見ると、上海周辺はまず出発地の周辺だからデモにも会わず、デモの調査ができませんでしたが、こっちの奥地のほうではその様子が、克明に記録されています。ですからデモのその広がり分かるし、ナショナリズムの空間的な広がりがよく分かります。しかも、それぞれの内容見るとさっきも言ったように、オルグの若者が配置され、反日、反英運動を一生懸命煽ったというところも分かりますし、そのことからコミンテルンによる組

織化がベースにあったのではないかと推察されます。そして、この事件がその後の中国のナショナリズムの引き金になり、やがては共産党政権を支えると言いますかね。そういうような動きになっていったと思われれます。これは、さっきの軍閥の呉佩孚などの勢力図です。うち山西省の軍閥は、日本のような国を作りたいとして、女性でも夜道を歩いても大丈夫というような国作りをやったところですよ。

また、この時代は、小隊の軍閥が次々に奥地のほうでも勢力を棲み分けたりもしています。例えば重慶というのは四川省の成都と並ぶ都になります。こっちの成都が省都です。この奥地へ入ると、川が流れる流域にそれぞれの町があるわけです。その町を歩いて行くと、図書館があつたり、道路が広がったり、そこにバスが通っていたりびっくりするような近代化が進んでいたのを目撃しています。書院生たちはびっくり仰天して何故だと、調査して行きますと、その知事はほとんど日本の留学生。中国の人はパブリックというか、おおよかの「公」という概念のない人が多いのです。ゴミがあつたら道へ捨てる。隅々まで私有してしまう。だから戦前までは町も汚れておつた。そこを綺麗にする。公園もつくられ、道路もつくられ、そういう中できちんとした町づくりをやっているという政策の成果を班員は感じ取ったりしました。このことはつまり、ここの棲み分けた軍閥がそういう日本流のシステムを地元へ投入したわけです。決して戦後の中国共産党がやったわけじゃないこともわかります。

こういう中国からの留学生による日本との繋がりみたいなことは、ほとんど研究対

象になっていませんね。これは満州の調査旅行です。満州事変があると中国側は東亜同文書院に、2年間ビザを出しませんでした。そこで急遽、満州への調査旅行しかできなくなった2年間がありました。満州については予習を全然していませんから。最初の1年目は何やっていいのか分からないぐらい。2年目はこれじゃいかんというわけで、きちんと予備調査をし、おかげで満州の調査が隅々までできていたわけです。

合わせてそういうのを見ていきますと、満州の中央部一帯は肥沃な土壤だということが分かってくるわけです。後に現地へ入った人たちも気がついた。元々、満州族の土地ですから遊牧地です。そこに漢民族が入ってきたりして農地を耕す時にここは小麦がもの凄くよくできる。今のニュースのウクライナと同じです。土壤が非常に豊かである。だからここへどんどん入って北のほうへも入っていった。しかし、ここ中央部はアルカリ性土壤です。水分が非常に多いのです。かつて私はここをずっと通ったことがあります。沼地というか、それがずっと広がっています。この東北側の地域が非常に肥沃であるという点で満州の穀倉地帯になりました。ウクライナみたいにあんな広がってはいませんが、中央部で南北に長いゾーン。ここが非常に経済的には豊かになるわけです。

あつ、時間の終了ですか。あと2、3枚お見せして終わります。これらはちょっと重要です。以上の各調査から全体をみていきますと、言語の調査からこんなにたくさん方言言葉を使っている。こっちはこんなにたくさんの通貨の種類がある。当時は統一通貨がありませんでしたから通貨の種類

は多いです。それをこういうふうに分布図にしてみても、共通項を拾ってみますと、まず同じような通貨のところをまとめながらグループ化しますとこんな図ができます。通貨は経済圏、言葉は文化圏としますと、それぞれはほぼ重なりを見せ、強力な地域枠を示します。これがその各地域の枠組みの図で、それぞれの地域に色んな核になる中心地、地域が併置しています。日本人が貿易をする時には、中国全体というよりはこういう浮かび上がってくる各地域枠群にもその特質を見ながら貿易をすすめることが重要であると云えます。大城立裕氏という沖縄の芥川賞作家の先生にこの図を送ったら、自分は中国のある町で全国から集まってくる物品をそういうものを徹底的に調査して仕分けしたことがある。その時に藤田先生が描いたこの図はぴったり合うってお褒めの言葉をいただいたことがあります。言葉も違う。それと合わせて貨幣も連動している。そういうように多様な文化圏とい

うものも大旅行調査報告を使うことによって生きてくるのですね。これが中国のその後の近代化の地域的なベースになったと思いますよ。(図は本号巻頭論文図1参照)

おわりに

というわけで、ほんとはもっとたくさんお話をしたかったですけど。あっという間の60分になり、申し訳ないですけど今回はここで終了です。しかし、そういうわけで中国近代化の中で行われてきた調査旅行記録の成果をどういうふうに抽出し、中国像をどう描いていくか。そういうようなことも今後も検討していきたいというふうに思っております。今日はせっかくだから多くのことをお伝えしようと思っていたのですが、ここまですべての3分の2ぐらいです。次回にお楽しみに。ということで、終わらせていただきます。どうも失礼しました。